

都市農業の役割

農 夫 井上秀一

神奈川県川崎市で、農家の長男として生まれ、学生時代は、家業の植木生産を手伝い、就農してから数年間、JAセレサ川崎青年部の先輩の勧めで、ハウスメーカーの建売等の庭づくりやブロック・レンガ積み等外構工事をしてきました。この経験を生かし、自分で生産した植木を直接庭づくりに使っていただけると、考えていました。

しかし、自分が31歳の時、父がくも膜下出血で倒れ、畑をほぼ一人で管理していくことと、庭木が売れなくなってきたこともあり、畑の植木の約3分の2を伐採し、野菜・果物を作ることで、管理と収益を上げることにしました。

まず考えたのは果樹で、住宅が近くにあるので、なるべく薬を使わない物と思い、キウイ、ブドウに。キウイは、直売ですぐ食べられるよう、樹上で完熟するイエロージョイ、ブドウは作りやすいとされる^{ふじみのり}藤稔を選びました。野菜も当然素人なので、作りやすいものからチャレンジしてみました。

しかし、1年目は果樹、野菜に対する施肥や間引き、管理の時期がわからず、思ったような収量は得られませんでした。2年目は、JA青年部の先輩や、栽培経験のある叔父に育て方のコツを、教えてもらい、なんとか、自宅前の直売所で販売することができました。

しかし、その売上げは以前の植木業のようにはいかず、次の年は、野菜の種類を増やし、収穫時期をずらして直売で売りやすくしてみました。年々売上げは、多くなってきているのですが、それでも考えていた程ではなく、農業の難しさを実感していました。

この頃には、子供もだいぶ手が離れて、妻も手伝ってくれるようになりましたが、管理面で手が回らない所が出ていました。そんな

折、親戚の叔父から、川崎市ふれあい農園の話の話を聞きました。

それは、いわゆる体験型農園で、市民農園とは違い、区画貸しではなく、農家の指示で植付け、収穫等を体験してもらい、直接栽培指導をするものでした。実際に叔父が運営している農園に作業風景を見学に行き驚きました。特に指示する訳でもなく、個々に役割が出来ていて、まるで農家家族のように作業をしていました。これは特に決めた訳では無く、自然と形が出来たそうです。そこに、これからの都市農業を見た気がしました。すぐに、川崎市農業振興センターに行き、開設の手続きをはじめました。

農具の準備では、予算内でどれだけの物が準備出来るか、初めて扱う人でも使いやすいか、数はどれぐらい必要か、水道を新設できるか等、見積もりを出すのも、あまり体験したことのない事だったので勉強になりました。

無事に、開園できましたが、農業振興センター指導員さんのご協力がなければ、かなり難しく、毎回の作業や農園利用者さんからの質問等もサポートして頂けるので、大変心強い限りです。

これは、ふれあい農園を始めてみて気が付いた事ですが、肥料代や苗・種代、耕運機等の燃料代、消耗品が意外にかかることです。出来るだけ良い苗・種と思うのですが、予算上限界が有り、1年目はかなり厳しい状況になりそうです。

このような状況なので、補助金は開設時だけではなく、できれば2年目以降もあると助かります。まだ、始まったばかりなので、戸惑うことも有りますが、自分自身勉強しながら、共に学んでいきたいと思えます。

(いのうえ しゅういち)